

基礎から学ぶ 楽しい疫学 第4版

中村好一 ● 著

〔評者〕市原 真(札幌厚生病院病理診断科)

手に取ったとき、とてもシンプルに見えた。タイトルも、表紙のデザインも、宣伝目的の帯でさえも、しかしパラパラパラと3めくりしたあたりで、おやつと思った。著者名や発行年月日などが載った「奥付」が冒頭に配置されていたからだ。

若すぎる顔写真に謎が深まる。来歴にもナニヤラ遊び心がにじむ。表紙から想像していた堅物な印象からの違和感に思考が衝突して、立ちすくむような気分になる。発行日欄の一行目は「第1版第1刷 2002年3月」、最終行が「第4版第1刷 2020年8月」。着実に版を重ねてきた名著である。それなのにこのノリはなんだ？

序文に目を通す。雑誌連載に端を発する原稿に、足かけ20年も手を加え続ける仕事の崇高さを思う。序文の最後には表紙デザインの真実が明かされる。第1章の頭にある「POINT」のデザインに笑みをこらえきれない。

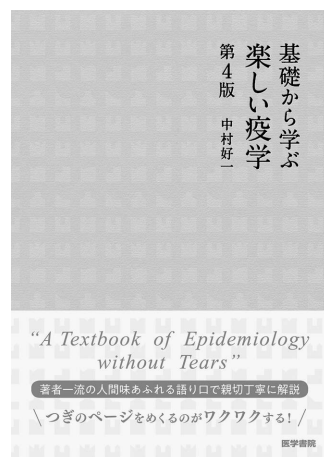
これらは全て制作陣の狙いであろう。早すぎる奥付と序文解説によって、冒頭から読者は「講師のナラティブ」を手に入れる。続けて展開される本文の筆致は王道、そこに物語性を生む役割を持つ脚注を連弾させる組み立て、本当に見事だ、思わずうなってしまう。「講師が語る姿」をイメージしながら楽しく読み進めることができる構成によって、本書は「勝って

いる」、それもかなり強い勝ち方をしている。優勝と言っていいだろう(何が?)。

記述疫学的重要性、コホート研究と症例対照研究の違い、検定よりも推定のほうがよい理由、層化すればいいというものでもないということ、これまで何度も学ぼうとして、そのたびに睡魔との戦いを余儀なくされてきたが、親しみすら覚えるほどの講師から語られるとこれほどまでに血が通うものなのか。

今から7、8年ほど前、どうにも疫学がわからなくて、疫学者たちにお勧めの勉強法を尋ねた。「米国時代の公衆衛生学講座のボスに師事した内容を自分でまとめたものを使っている」「ロスマンくらいは読んだほうがいい」。前者は参考にしようがないので、とりあえず『ロスマンの疫学』(篠原出版新社)を購入。当時読み終えてわかったことは、「拾い読みでは疫学には太刀打ちできない」ということだった。断片的な概念を単語帳のように覚えても歯が立たない。だから一度は何かを通読したほうがいいのだろうとは思っていたが、残念ながらロスマンは私には少々読みにくかった。「ロスマン先生」から疫学を教わることに対する必然性とモチベーションが足りなかったのかもしれない。

そんな怠惰な私もようやく疫学の師を見つけた思いである。皆さ



んも、著者の顔を思い浮かべながら、ぜひ「疫学の文脈」を手に入れてほしい。本書はテキストブックではなく優れたコンテキストブックである。もっと早くこの本を知っておけば良かったと悔しく思うが、時代の選択に耐えた名著を今手に入れる喜びもある。蛇足だが本書を通読した後にロスマンを読むと普通に読めたので笑ってしまった。私は疫学の文脈を一つ身につけたのであろう。

A5・242頁

2020年8月

定価：本体3,200円＋税

[ISBN978-4-260-04227-7]

医学書院刊